

## マイノングの事態論における可能性と存在

慶應義塾大学 小関健太郎\*

### はじめに

どのような対象が世界の構成要素となるのかを解明することは形而上学や存在論のひとつの中心的な課題であるが、哲学者によって「発見」された重要な対象として、事態 (Sachverhalt, state of affairs) と呼ばれる対象が挙げられる。直観的には事態は、土星や三角形のような「もの」的対象に対して、〈土星が環を持つこと〉や〈三角形の内角の和が 180 度であること〉のような、その成立や不成立を問題にすることができるような「こと」的対象である<sup>1</sup>。事態という対象を明確かつ積極的に評価する立場としてマイノングの事態論は先駆的業績のひとつであり、対象論 (Gegenstandstheorie) として知られるマイノング自身の形而上学的プログラムにおいても大きな位置を占めている。マイノングは彼の事態論を通じて様相の問題を扱うことに力を注いでおり、その議論は後期の著作である『可能性と蓋然性について』 (*Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit*, Meinong 1915) で詳しく展開されている。

マイノングによって「対象を制限なしに、特にその実在ということについての制限なしに扱う学」 (Meinong 1921, 13) として位置づけられた対象論は、現代形而上学においてもその理論のいくつかの特徴ある部分がマイノング主義 (Meinongianism) として再構成されている。対象論とマイノング主義が共有する代表的な特徴はその「対象」の無制限性、とりわけ非存在対象の認容であるが、非存在対象に分類される対象として、(1cm 背が高い私や、黄金でできた山のような) 可能的対象は有力な候補である。このためマイノング主義は、可能的対象の存在論的身分をめぐる論争を中心に現代の様相の形而上学にも大きく寄与してきた<sup>2</sup>。その一方で、同じ対象論的な枠組みにありながら、マイノング自身が提示している様相理論の全体像は現代のマイノング主義のものとは少なからず異なるものである。マイノングの様相理論は、様相の形而上学に対して、対象論的あるいはマイノング主義的な観点からさらに別の視点や立場をもたらさうものとして注目に値する。

本論文の目的は、マイノングの様相理論のうち特に可能性に関して、対象論的な事態論と可能性の概念がどのように結びついているかを明らかにし、様相の形而上学におけるその位置づけを示すことである。結論を先取りすれば、マイノングの可能性の理論は、事態を可能性という様相の基礎的な担い手とする一種の様相主義 (modalism) と呼ばれる立場を採るものとして分

類できるが、非存在対象の認容を含む存在論的な寛容性と結びつく形で、可能的な事態の存在論的身分に関する論点に新しい説明を与えることができる。

本論文の構成は以下の通りである。まず、マイノングの事態論の基本的な部分と、その対象論的な側面を整理する（1節）。次に、マイノングの事態論に基づく可能性理論を、可能的な事態の存在論的地位の問題を中心に素描する（2節）。最後に、この理論に現代的な観点から検討と評価を加える（3節）。

## 1. 事態論とその対象論的側面

事態が厳密にどのようなものとして理解されるかは理論によって細部で異なるが、広く事態に固有のものと考えられる事柄として、その成立（obtaining）と非成立（non-obtaining）が挙げられる：すなわち、事態は成り立っているか成り立っていないようなものである<sup>3</sup>。例えば現実世界において、〈東京タワーが存在すること〉や〈東京タワーが赤いこと〉という事態は成り立っているが、〈東京タワーが青いこと〉という事態は成り立っていない。これに対して、東京タワーという建築物はそれ自体で成り立つことや成り立たないことはないという点で事態から区別される。

マイノングを含むドイツ・オーストリア哲学の系譜における事態論は実際のところ、現代の事態論の重要な源流に他ならない。特に広義の布伦ターノ学派においては、マイノング以外にもシュトゥンプフ、マルティ、フッサーールらによって、事態やそれに類するものが積極的に論じられている<sup>4</sup>。今日最もよく知られている事態論のひとつである『論理哲学論考』におけるヴァイトゲンシュタインの事態論に関しても、その背景としてこれらの業績を無視することは困難である<sup>5</sup>。

シュトゥンプフに帰される事態（Sachverhalt）という用語が主に現象学者たちの間で用いられたのに対して、マイノングは事態に相当するものを、「もの」的对象としての客体（Objekt）と対比して客態（Objektiv）と呼んでいる（Meinong 1910, 44f., Meinong 1915, 26f.）<sup>6</sup>。事態と客態の差異はほとんど名目的なものであり、本論文ではこれらの区別は問題にならないため、以下では断りのない限り事態と客態を交換可能な仕方で用いる<sup>7</sup>。事態の成立あるいは非成立に相当するものとして、客態は事実に（tatsächlich）あるいは非事実に（untatsächlich）である。事実に客態は単に事実（Tatsache）とも呼ばれる。

客態の基本的な性格は、思考あるいは志向性との関係や言語との関係によって特徴づけることができる<sup>8</sup>。志向性との関係において、客態はマイノングが想定と判断と呼ぶもの、現代的な表現で言い換えれば、志向的あるいは

命題的態度に含まれるものの対象である (Meinong 1910, §20, §§15-19). 例えば、私が 8191 は素数であるということを信じたり想定している場合、信じたり想定されていることは〈8191 は素数であるということ〉という客態である。言語との関係において、客態は文や名詞節、動名詞の意味 (Bedeutung) である (Meinong 1910, §10). したがって、「8191 は素数である」という文や、「8191 は素数であるということ」という名詞節あるいは動名詞の意味は、〈8191 は素数であるということ〉という客態である。

こうした客態の基本的な性格は事態論一般にある程度共通するものである。しかしながら客態はいくつかの点で対象論の立場を前提する固有の性格を有する。

まず、対象論の基本的な立場を確認しよう。「対象を制限なしに」扱う学としての対象論の立場を支える中心的な原理は、その成立をマリ (E. Mally) に負うものであるが、「相在の存在からの独立性の原理」(das Prinzip der Unabhängigkeit des Soseins vom Sein, 独立性原理) と呼ばれる (Meinong 1904, §3, Meinong 1910, 78). 独立性原理によれば、対象が何らかの性質を持つこと (Sosein, 相在) は、その対象が存在すること (Sein, 存在) を必ずしも要求しない。したがってこの原理は、性質を持つが存在しない対象として、いわゆる非存在対象を認容する。

独立性原理に伴って、事態に関しても存在や非存在に関する事態と相在に関する事態を区別することが有用である。対象の存在と非存在を規定する事態はそれぞれ存在客態 (Seinsobjektiv) と非存在客態 (Nichtseinsobjektiv) と呼ばれ、これに対して肯定的あるいは否定的な相在を規定する事態は一般に相在客態 (Soseinsobjektiv) と呼ばれる (Meinong 1904, 489, 491f.). 典型的には、存在客態は「S が存在する」(S ist) のような表現に対応し、相在客態は「S は P である」(S ist P) のような表現に対応する。

対象論的な事態論は、事態の成立あるいは事実性と、事態の存在との間に単純な対応関係を与えることを可能にする。まず、ある客態が事実的であることは、その客態が (存立する (bestehen) という意味で) 存在することに対応する (Meinong 1904, 487). ここでさらに、非存在対象が許容されることで、非事実的な客態についても並行して対応関係が与えられる。すなわち、事実的な客態が存在者であるのに対して、非事実的な客態は非存在者である (Meinong 1915, 39). 事実的な客態にさまざまなものがあるように、非事実的な、非存在者としての客態も単なる無や欠如ではない。

マイノングは客態に関する客態、すなわち高階の客態も真正の事態として認めている。したがって、ある客態 O が事実的である場合には例えば以下の

ようなことが成り立っている。

(1.1) 客態 O が事実的である [=客態 O が存在する]

(1.2) 客態 O の存在が事実的である

(1.3) 客態 O の存在客態 O'が事実的である

一方でマイノングは客態の事実性（存在）や非事実性（非存在）を、高階の客態の事実性や非事実性に依存しない、基本的なものとみなしている (Meinong 1910, 69-71)<sup>9</sup>。マイノングの議論の要点は根拠の無限後退に関するもので、次のように整理することができるだろう。マイノングの主張とは反対に、客態の事実性が高階の客態に依存する、つまり (1.1) は (1.3) に依拠していると仮定するとしよう。しかしながらさらに仮定から、(1.3) における客態 O'の事実性を根拠づけるためには客態 O'の存在の事実性が、ひいてはさらに高階の存在客態 O''の事実性が要請されるので、この繰り返しのよって事実性や存在の根拠に関して無限後退に陥る。このような無限後退は、客態の事実性や存在が高階の客態の事実性や存在に根拠上先行する、すなわち (1.2) や (1.3) が (1.1) に依拠しているというマイノングの主張においては回避されている。

## 2. 可能性の理論と事態

このような対象論的な事態論から、マイノングは可能性の理論を展開している (Meinong 1910, §13, Meinong 1915)。本節の目標は、マイノングの可能性理論を素描することと、その中でも可能的なマイノング的事態、すなわち可能的な客態がどのような存在論的地位を持つかを明らかにすることである。

マイノングが可能性という様相概念を事態論という形而上学的枠組みで説明することを試みる背景として、彼の可能性理論が可能性 (Möglichkeit) と確率 (Wahrscheinlichkeit, 蓋然性) の理論という全体の一部であることは注目に値する。『可能性と蓋然性について』の序文で述べているように、マイノングはフォン・クリースの確率論の、「客観的可能性」(objektive Möglichkeit) の概念に基づく確率の客観的解釈を自身の研究の早い段階から肯定的に評価しており、これを対象論そのもののひとつの原動力とも振り返っている (Meinong 1915, XVI)<sup>10</sup>。マイノングの可能性概念はこの確率論的観点からの客観的可能性の概念の延長線上にあり、マイノングは客観確率にあたるものを可能性、主観確率にあたるものを(狭義の)確率という言葉

で整理し直している<sup>11</sup>。

客観的かつ確率的なものとしての可能性の理論は、それぞれの側面で説明を要する。ひとつの問題は、可能性の存在論的問題である：もし可能性が客観的なものであるならば、それはどのように世界のうちに位置づけられるのだろうか？ もうひとつの問題は、量的なものとしての可能性の問題である。確率的なものとしての可能性という概念は必ずしも奇妙なものではない：例えば、〈私のサイコロの出目が偶数であること〉と、〈私のサイコロの出目が6であること〉はいずれも可能的であるが、両者は「同等に確からしい」わけではない。可能性は単に必然性や現実性と対置されるだけでなく、比較可能なものであるように思われる。もし可能性が客観確率に相当するものとみなすことができるようなものであるならば、前者の「可能性」は  $1/2$  であり、後者の「可能性」は  $1/6$  であると言うことができるだろう。この場合に可能性は量的なものとしても説明される必要がある。

マイノングは量的なものとしての可能性を表現するために、可能性最小と可能性最大を両端とするような、可能性直線 (Möglichkeitlinie) の概念を用いている (Meinong 1915, §16)。したがって2つの課題は、この可能性直線がどのように存在論的に、世界のうちに位置づけられるのかという課題に集約される。マイノングは、可能性直線の両端、すなわち可能性最小と可能性最大に相当する存在論的概念を、客態の非事実性と事実性であるとみなす (Meinong 1915, 94)<sup>12</sup>。マイノングの可能性理論において、客態の事実性や非事実性という規定性と可能性直線を統合する中心的なアイディアは、客態の事実性と非事実性の中間領域として可能性を位置づけることに他ならない。この中間領域は未事実性 (Untertatsächlichkeit) と呼ばれる<sup>13</sup>。逆に言えば、可能性直線において事実性と非事実性は広義の未事実性の特別な場合である。不可能なものは事実的ではありえないので、事実的なものは可能的でもあり、これに対して事実性未満の可能性は単なる可能性 (Nurmöglichkeit) と呼ばれる (Meinong 1915, 99f.)。

事実性や非事実性は客態の規定性であるので、客態の観点からあらためて整理しよう。これらの規定性と存在の関係として、対象が存在に関して事実的であることはその対象についての存在客態が事実的であることであり、非事実的であることは存在客態が非事実的であることであった。ここで問題になるのは、同様の事柄の可能性のケースである。対象が存在に関して可能的であることは、その対象についての存在客態のどのような規定性なのだろうか？ 同様の問題は非存在客態や相在客態についても成り立つが、以下では存在客態について論じる<sup>14</sup>。

この問題についてのひとつの見方は、可能性規定性を存在規定性と同一視し、存在そのものを量的なもの（存在強度（Seinsstärke）あるいは存在量（Seinsbetrag）（Meinong 1915, 110f.））とみなすことである。この立場はマリラによって検討された立場として挙げられているが、マイノングの評価は否定的である。彼の批判の要点は、存在がそれ自体で量的なものであれば、それがゼロであることは端的な欠如であって、量だけでなく規定性も欠如することになるという点である。例えば、〈私の（6面の）サイコロの出目が7であること〉という客態は非事実的であり、したがって〈〈私のサイコロの出目が7であること〉が存在すること〉は非事実的である。しかしながら、この存在客態が非事実的であることはそれが存在に関する規定であることを変えるものではなく、元の存在客態そのものが〈〈私のサイコロの出目が7であること〉が非存在であること〉という非存在客態に変化するわけでもない<sup>15</sup>。可能性ゼロの存在客態、すなわち非事実的な存在客態は、規定性のない客態でも非存在客態でもなく、依然として存在に関する規定性なのである。

マイノングの代案は、存在それ自体を量的なものとはみなすのではなく、存在についての量的規定として、存在高度（Seinshöhe）という新しい規定を客態に関して導入することである（Meinong 1915, 111f.）。この立場では、ある客態が対象の存在や非存在を規定するものであることは、あくまでカテゴリー的な規定性であるとみなされる。一方で存在や非存在は、存在高度という独立の規定を通じて量的に規定されると考える<sup>16</sup>。特別な場合として、客態の存在高度が最大（=可能性 1）であればその客態は事実的であり、最小（=可能性 0）であれば非事実的である<sup>17</sup>。

以上の再構成を踏まえて、本節のもう一つの目標であった、可能的な客態それ自体の存在の問題に移ろう。事実性が可能性の特別な場合であることも踏まえれば、事実的な客態の場合と類比的に、ある客態 O が可能的である場合には以下のことが成り立っていると考えることができる。

- (2.1) 客態 O が可能的である
- (2.2) 客態 O の存在が可能的である
- (2.3) 客態 O の存在客態 O' が可能的である

前節末における、客態における事実性や非事実性の基本性と同様の議論を可能性に関しても適用すれば、客態の可能性は高階の客態の事実性や非事実性、あるいは可能性に依拠しているのではなく、あくまで当の客態の可能性に高階の客態が依拠している。その上で (2.1) や (2.2) の解釈上の問題は、

事実性や非事実性の場合と異なり，可能的であることや存在が可能的であることは，端的な存在や非存在と置き換えることができないことである．この点を補って，存在高度の概念を通じて可能性と存在を結びつけることで，(2.3) は次のように言い換えることができる．

(2.4) 客態 O の存在客態 O'における，客態 O の存在についての存在高度が中間的である

客態 O の存在についての存在高度が中間的であることは，客態 O が端的に存在するのでも，端的に非存在であるのでもないことを帰結する．しかしながら，存在強度と存在高度の議論から明らかなように，このことは客態がいわば「薄く」存在することを意味するのではない．可能的な客態は，マイノングが存在に関して未確定 (seinsunbestimmt) な対象と呼ぶものとみなすことができるだろう (Meinong 1915, 179f., 210)<sup>18</sup>．

### 3. 可能性と存在

マイノングの事態論的な可能性理論は，現代的な観点からも検討する意義のあるものである．事態論における事態の役割に関して，Textor (Textor 2020, §2.2) は，事態を様相の基礎的な担い手とする立場として，Forbes (1989) と Forbes の同著でも言及されているライナッハの『否定判断の理論について』(Zur Theorie des negativen Urteils, Reinach 1911) の議論を挙げているが，マイノングの様相理論もこの分類に当てはまる：実際のところ，まさにこの点についてライナッハはマイノングとフッサールの議論を参照している (Reinach 1911, 84)．

現代の様相の形而上学の文脈で Forbes が事態論的な様相理論を論じる動機と意義として，様相主義 (modalism) と反様相主義 (anti-modalism) をめぐる論争への貢献がある．様相主義は，可能性や必然性といった様相概念を理論的にプリミティブなものとみなし，これらを何らかの対象への量化に還元しない立場である (Forbes 1989, 78, 131)<sup>19</sup>．反対に還元的な立場は反様相主義と呼ばれるが，様相主義に直接批判的でない立場も含めて，より一般的に非様相主義とも言うことができるだろう．非様相主義の代表例は可能世界論であり，可能世界論において可能性や必然性は世界への量化によって説明される．例えば，ある命題が可能的に真であるのは，ある可能世界でその命題が真である場合である．前節で論じたようにマイノングの様相理論は，少なくとも可能性に関して，様相を量化的な概念として説明せず，事態

のプリミティブな規定とみなすという点で様相主義に分類することができる。

Forbes の事態論的な様相理論の意味論的な側面と形而上学的な側面のうち、後者は比較的簡単な仕方で提示されるに留まっているが、事態の成立や不成立と存在の関係に関して 2 つの主張を見出すことができる。第一に、Forbes は事態の成立と存在を共外延的な概念とみなしている<sup>20</sup>。したがって、真な言明の相関者は存在する事態である。第二に、否定的事態が事態とその成立の否定的様態の実体化 (hypostatization) として説明され、このことはその事態が欠如している場合にあたるとされる (Forbes 1989, 137)。Forbes は彼の全体的な立場としてマイノング主義に明示的に否定的であり、非存在対象を認めていない (Forbes 1989, 20ff.)。したがって、欠如している事態はマイノング主義的な非存在対象としては考えられていない。一方で、実在的 (real) な事態に直接的または間接的に依拠して (in virtue of) 成立する事態として仮想的 (virtual) な事態を認めることで、否定的事態は事態の欠如に依存する仮想的な事態として位置づけられている。

これらの 2 つの主張は、事態論それ自体としては擁護可能なものでありうる<sup>21</sup>。それにも関わらず私の見る限り、この立場には様相主義という文脈において特有の問題が存在する。具体的に、可能的な事態の例として、〈私のサイコロの出目が 6 である〉という事態を考えよう。Forbes によれば、事態が可能性の担い手であるということは、事態が可能であるという存在の様態 (mode of being) で成立しているということである (Forbes 1989, 139)。しかしながらここで問題になるのは、「可能的に存在する/成立している」ことと、単に「存在する/成立している」ことがどのように具体的に区別されるかという点である。存在しないものが様相の担い手になることはできないという非マイノング主義的な前提のもとでは、可能性の担い手としての事態は、存在するか、存在しないが「ある」かのいずれかである。しかしながら前者の場合には、ある命題が可能的に真であることが単に真であることを伴うことになり、後者の場合にはそのような「あり方」についての非マイノング主義的な説明が必要となる。

以上の問題は、可能的成立の問題と呼ぶことができるだろう。同様の議論が、可能的不成立に関しても成り立つ。まず、〈私のサイコロの出目が 6 である〉という事態に対応する形で、「私のサイコロの出目が 6 である」という命題 (A) を考える。この命題に関して、肯定的な可能性言明と否定的な可能性言明をそれぞれ考えることができる：

(P1) 私のサイコロの出目が 6 であることは可能である (◇A)

(P2) 私のサイコロの出目が 6 でないことは可能である (◇→A)

ここで困難を生じるのは P2 に対応する事態である。P2 で表現されている可能性の担い手は〈私のサイコロの出目が 6 でないこと〉という否定的事態であるが、前述の通り Forbes によれば、否定的事態は否定されている事態、すなわち〈私のサイコロの出目が 6 であること〉の欠如に依存する。しかしもしこの事態が欠如しているなら、〈私のサイコロの出目が 6 でないこと〉は可能的であるだけでなく、やはりすでに成立している。

これらの問題に対する、複雑でない解決策は 2 通りあるように思われる。ひとつは、事態の成立と存在の一致を否定し、存在する事態の異なる規定性として成立や可能性を説明することである<sup>22</sup>。そしてもうひとつは、対象論的、あるいはマイノング主義的な様相主義を採用し、非存在者としての非事実的事態や、存在に関して未確定な対象としての可能的事態を認めることである。両者の間の選択は（マイノング主義への賛否を中心として）メタ形而上学的な選択と紐づいているが、マイノング主義的な様相の形而上学の新しい可能性としては、後者の選択肢は十分に検討に値するものだろう。

### おわりに

本論文の課題は、現代マイノング主義と基本的な特徴を共有するマイノングの対象論について、対象論の枠組みにおけるマイノング自身の事態論と様相理論に注目し、特に可能性という様相に関してその位置づけを示すことであった。マイノングの事態論における可能性概念は、事態の非事実性と事実性の中間領域としての可能性あるいは未事実性によって説明される。特に存在を規定する事態に関して、非事実性、可能性（未事実性）、事実性という様相的規定の系列は、事態の存在や非存在とは区別される独立の規定であり、存在についての量的な規定として位置づけられる。この理論は、存在に関して未確定な対象としての可能的な事態を帰結する。現代的な観点からは、マイノングの様相理論は、事態を様相の基礎的な担い手とする一種の様相主義として分類することができる。同時にこの理論は、非存在対象としての事態や、存在に関して未確定な対象としての事態を認容する点で新しいタイプの様相主義であり、様相主義における可能的な事態の存在に関する論点に明確な説明を与えるひとつの選択肢である。

### 注

\* 日本学術振興会特別研究員 DC。本研究は JSPS 科研費 JP20J22514 の助

成を受けたものである。匿名の査読者から複数の有益な指摘をいただいたことに感謝する。

<sup>1</sup> 以下、事態を表す表現を適宜〈〉で強調する。

<sup>2</sup> Cf. Yagisawa (2020).

<sup>3</sup> Cf. Textor (2020), 序文。

<sup>4</sup> Cf. Smith (1992). 包括的な邦語文献として倉田 (2008), § § 2-3.

<sup>5</sup> Cf. Smith (1978).

<sup>6</sup> 「客態」の訳語は篠原 (1984) の提案に従う。

<sup>7</sup> Cf. Meinong (1910), §14.

<sup>8</sup> Cf. Chisholm (1973), 213f.

<sup>9</sup> Cf. Findlay (1963), 75f.

<sup>10</sup> Cf. Simons (1992), 205.

<sup>11</sup> Meinong (1915), § 4, § 6. Cf. Simons (2013), 127. 確率論的観点からの評価に関しては Kamlah (1987) を参照。

<sup>12</sup> Poser はこのような、可能性を非事実性と事実性の中間に位置づける立場は、伝統的には可能性に関するメガラ学派的な解釈であることを指摘している (Poser 1972, 191). Cf. Simons (1992), 208f.

<sup>13</sup> マイノングは厳密な意味での可能性を未事実性の特別な場合 (inhäusive Untertatsächlichkeit) とみなしており、同様の理由で可能性直線から事実性直線が区別されている (Meinong 1915, § 22). この区別自体は意味のあるものであるが、未事実性と可能性は明示的に区別せず用いられる場合もあり (Meinong 1921, 16), 本論文でもこの区別は重要でないので、以下では未事実性と可能性を同義的に用いる。同様の理由で、様相契機 (Modalmoment) も考慮に含めない (存在高度と様相契機の関係については Findlay (1963), 203f. 及び Jorgensen (2004), 110ff. を参照)。

<sup>14</sup> 以下の議論の関連箇所では、マイノングは「存在」を相在を含む広い意味での存在として用いるとしている (Meinong 1915, 106). Cf. Jorgensen (2004), 110f.

<sup>15</sup> このことは、この非存在客態が事実的であることを排除しない。例外的な場合を除いて、存在客態と非存在客態に関して、一方の事実性は他方の非事実性を含意する。Cf. Meinong (1915), 95ff., 110.

<sup>16</sup> 相在の場合も含まれる。非存在の場合については非存在高度 (Nichtseinshöhe) とともに表現されている (Meinong 1915, 292).

<sup>17</sup> Meinong (1915), 292. ただしこの箇所では様相契機の有無も問題にされている。Cf. Findlay (1963), 203f.

<sup>18</sup> このような対象は不完全対象 (unvollständiger Gegenstand) の一種である。また, (2.3) から (2.4) への書き換えと同じ議論は (2.1) についても成り立つ。マイノングは, 可能性の最終的な根拠は不完全な客体にあると考えている (Meinong 1915, 167)。

<sup>19</sup> 近年の展開を含む概説として Borghini (2016), Ch. 3.

<sup>20</sup> Forbes (1989), 50. 同箇所は事実 (fact) に関する議論であるが, Forbes (1989), 137 で事態論に継承されている。

<sup>21</sup> 類似の路線の事態論の例として, Kukso (2006)。

<sup>22</sup> Cf. Reicher (2009), § 3.1.

## 文献表

- Borghini, Andrea. 2016. *A Critical Introduction to the Metaphysics of Modality*. Bloomsbury.
- Chisholm, Roderick M. 1973. "Homeless Objects." *Revue Internationale de Philosophie*, 27 (104/105 (2/3)): 207–23.
- Findlay, John N. 1963. *Meinong's Theory of Objects and Values*. Oxford University Press.
- Forbes, Graeme. 1989. *Languages of Possibility*. Basil Blackwell.
- Jorgensen, Andrew. 2004. "Meinong's Much Maligned Modal Moment." *Grazer Philosophische Studien*, 64 (1): 95–118.
- Kamlah, Andreas. 1987. "The Decline of the Laplacian Theory of Probability: A study of Stumpf, von Kries, and Meinong." In *The Probabilistic Revolution, Volume 1: Ideas in History*, edited by Lorenz Krüger, Lorraine J. Daston, and Michael Heidelberger, 91–116. MIT Press.
- Kukso, Boris. 2006. "The Reality of Absences." *Australasian Journal of Philosophy*, 84 (1): 21–37.
- Meinong, Alexius. 1904. "Über Gegenstandstheorie." In *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, II.
- . 1910. "Über Annahmen." 2. Aufl. In *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, IV.
- . 1915. "Über Möglichkeit und Wahrscheinlichkeit." In *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, VI.
- . 1921. "Selbstdarstellung." In *Alexius Meinong Gesamtausgabe*, VII.

- . 1969–1978. *Alexius Meinong Gesamtausgabe*. Akademische Druck- und Verlagsanstalt.
- Poser, Hans. 1972. “Der Möglichkeitsbegriff Meinongs.” In *Jenseits von Sein und Nichtsein. Beiträge zur Meinong-Forschung*, edited by Rudolf Haller, 187–204. Akademische Druck- und Verlagsanstalt.
- Reicher, Maria E. 2009. “Introduction.” In *States of Affairs*, 7–37. ontos.
- Reinach, Adolf. 1911. “Zur Theorie des negativen Urteils.” In *Gesammelte Schriften*, 56–120. Max Niemeyer.
- . 1921. *Gesammelte Schriften*. Max Niemeyer.
- Simons, Peter M. 1992. “Łukasiewicz, Meinong, and Many-Valued Logic.” In *Philosophy and Logic in Central Europe from Bolzano to Tarski*, 193–225. Springer.
- . 2013. “And Now for Something Completely Different: Meinong’s Approach to Modality.” *Humana.Mente*, 25: 119–34.
- Smith, Barry. 1978. “Wittgenstein and the Background of Austrian Philosophy.” In *Wittgenstein and His Impact on Contemporary Thought*, edited by E. Leinfellner. Hölder-Pichler-Tempsky.
- . 1992. “Sachverhalt.” In *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, edited by J. Ritter and K. Gründer, 8:1102–13. Schwabe.
- Textor, Mark. 2020. “States of Affairs.” In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta, Summer 2020. <https://plato.stanford.edu/archives/sum2020/entries/states-of-affairs/>; Metaphysics Research Lab, Stanford University.
- Yagisawa, Takashi. 2020. “Possible Objects.” In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta, Summer 2020. <https://plato.stanford.edu/archives/sum2020/entries/possible-objects/>; Metaphysics Research Lab, Stanford University.
- 倉田剛. 2008. 『オーストリア哲学における命題的对象・モメント・非存在者：現代オントロジーの観点から』。東京大学博士論文。
- 篠原隆. 1984. 「マイノンクの対象論について：対象の Außersein, Sosein, Nichtsein」. 『東洋大学大学院紀要』, 20: 57–69.